

稲作文化伝え30年 日本の米カレンダー

水評論の第一人者富山和子氏が作る「日本の米カレンダー」が来年2019年版で30回を数える。思えば海部内閣当時、コメ開放の不穏な動きに危機を感じた富山氏が思いあぐねた末に考え出したのが、稲作文化再発見の願いを込めた「日本の米カレンダー」作りであった。

「宇佐のマチュピチュ」6月

大分県の美しい風景、例えばため池の女王「白水ダム」、「空から見た日田杉の林」、昔ながらの水田風景が残る「田染荘」、表紙にもなった豊後大野市朝地町の「農業用・若宮井路」、「由布のわらこづみ」「九重町の掛け干し」など十指に上る風景が取り上げられ反響を呼んだ。来年の最終号は6月に宇佐市院内町の「和製マチュピチュ」が謹上花を添えることとなった。

製作会社の資料によると、作者の高齢化と健康にも配慮し、30号を最後に富山氏は執筆を終えることになったとあった。富山氏の終始一貫した評論哲学は「水田は文化と環境を守る」であった。「水は生きている」をはじめ森、道、米、海など一連の“生きている”シリーズ。その著「水と緑と土」(中公新書)を皮切りに「水と緑の国、日本」「水の文化史」「水の旅」「日本の風景を読む」「水と緑、日本の原風景」など十指を超える著書の中で裏付けられる。その富山氏がショックを受けたのは平成の初め海部、村山と続く内閣の頃、当時のウルグアイ・ラウンド(現WTO)の国際世論合意によるコメの開放であった。このままゆくと日本のコメ文化がつぶれると危機を感じ思いあぐねた末、稲作文化が創り出した日本の美しい風景を12カ月のカレンダーにして理解を求めることにした。

風景写真の第一人者前田真三(北海道)の作品との出会いで勇気づけられたと聞く。

カレンダー製作がきっかけで、提唱した「棚田」がブームに、水田はダムという“富山哲学”が一気に広まり、「米ハーバード大学にも招かれ、世界中から集まった学者を前に「水と日本文化」の基調講演をし、反響を呼んだ。前述の著書「水と緑と土」は8年前にメッセージを大幅加筆、改訂版として世にだした。環境問題のバイブルとしてファンは多い。

富山氏執筆の30周年最終号は「備前焼・水指」(1月)「八海山の雪景色」(2月)

「奈良 明日香」(3月)「六道の堤の桜」(4月)「春 能登 千枚田」(5月)

「宇佐のマチュピチュ」(6月)「北海道 水田」(7月)「天空の田畠」(8月)

「近江富士と稲穂」(9月)「村苺田と杉林」(10月)「柿の木」(11月)

「しめ縄」(12月)

(大分合同新聞社元文化部長 永松秀敏)